

銀座を歩く 寺田寅彦：生活と科学の交差点

YOKOYAMA, Yasuko / 横山, 泰子

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

3

(終了ページ / End Page)

25

(発行年 / Year)

2022-02-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025638>

銀座を歩く寺田寅彦

生活と科学の交差点

横 山 泰 子

物理学者寺田寅彦は、「新しい都会人の生活空間とスタイルを創っていった、時代に先行する人物」¹⁾であった。彼は長く東京に住み、「銀座アルプス」(昭和8年)等の随筆を書いたが、「1930年代の随筆群など、寅彦と連立って当時の銀座を散歩するような気分ひたることだけを念頭において読んで行っても十分味わい深い」とされている²⁾。

寺田は、若い頃の一時期、銀座で生活した経験を持った。その時のゆかりの地を、『銀座歴史散歩地図 明治・大正・昭和』が詳細に調べている³⁾。大人になった寺田が住んだのは、現在の東京都文京区内であった⁴⁾。寺田は志村(東京都板橋区)に別荘を建てていた⁵⁾。彼は繁華街から距離のある静かな所を生活空間とし、そこから賑やかな銀座に通っていた。

新しい都会人・寺田寅彦は、何をしに銀座に行ったのか。寺田寅彦の日記、書簡、随筆類から、銀座に関する記述に注目し、生活者としてまた科学者としての寺田がどのように銀座と関わったのかを明らかにしたい。

1 寺田寅彦と銀座(明治～関東大震災まで)

まず、寺田寅彦の生涯について簡単に記す。寺田寅彦は、明治11年東京麹町区平河町で、陸軍会計監督の父利正と母亀の間に生まれた。生後、父の仕事の影響で名古屋、高知、そして再度東京へうつって番町小学校に通学した。明治19年には父の退役で高知に戻る。熊本第五高等学校を経て、明治32年に東京帝国大学理科大学物理学科へ入学。谷中の寺に下宿し、後に西方町に転居。大学院を卒業した後、ドイツへ留学し、諸国を遊歴。帰国後理科大学に就職し、

本郷曙町に転居。大正8年に胃潰瘍にかかり、療養中に随筆を書き始める。以後、航空研究所、地震研究所、理化学研究所などで物理学、地震学等の研究に従事し、昭和10年に没した（58歳）。

寺田は「銀座アルプス」で、自分の東京と銀座に関する記憶は、三つの部分（2本の短い線、1本の長い線）から成り立つと書いた。2本の短い線とは、子どもの頃と、単身で東京に滞在した一時期にあたる。1本の長い線とは、勉学のために上京してから昭和にいたるまでの時期である。第一短線時の記憶として、明治18年頃の「東京の銀座のある冬の夜」が取り上げられている。当時8歳の彼は、両親に連れられて新富座の芝居を見た後、銀座まで歩いた。父が最前列にしていた玉屋（時計店）に入り、外国の珍しい玩具を見せられた。

如才のない中老店員の一人は、顧客の老軍人の秘蔵子らしいお坊ちゃんの自分の前に、当時としてはめったに見られない舶来の珍らしい玩具を並べて見せた。その一つは鼠色の天鵝絨で作った身長わずかに五、六寸くらいの縫いぐるみの象であるが、それが横腹の処のネジを捻ると、ジャージャーと歯車のすれ合う音を立てながら走り出す、そうしてあの長い鼻を巧に屈伸して上げたり下げたりしながら勢よく走るのである。もう一つは毛深い熊が後足を前に投出して坐っている、それが首と前脚とを動かして滑稽な格好をして踊り出すと腹の中でオルゴールの可愛らしい音楽が聞こえてくるのである⁶⁾。

父が買ってくれるのではと期待しつつ遠慮していたら、結局買ってもらえず帰宅したという、いかにも子どもらしい思い出である。芝居見物から玉屋までの散歩と玩具の記憶が、寺田の銀座体験の原点であり、この思い出が「感傷的な色彩を帯びて自分の生涯に附纏ってきた」という点が興味深い。新富座周辺の芝居茶屋（観客に各種の便宜を提供した施設）の光景を「徳川時代の一角を覗いてきたような幻覚」と書いている。新富座周辺は徳川時代に通じていたが、珍しい物が置いてある銀座は西洋に通じていたのである。

彼は鉄道馬車が好きで、わざわざ乗りに行ったという。もらい物の舶来のビスケットの箱に、美しい郵便馬車の絵があり、その絵と現実の鉄道馬車が彼

の頭の中で結びつき、「夢の西洋」幻想がうまれた。「自分の「記憶」の夢の中では、この郵便馬車と、銀座の鉄道馬車とがすっかり一つに溶け合ってしまった、切っても切れない聯想の糸で繋がっているのである」と寺田は述べる。その後、寺田は西洋産の物理学を学び、西洋産の芸術を愛好するようになり、留学までする。彼に西洋への憧れをもたらした現実的な場所として銀座を位置づけることができるだろう。

次に寺田が銀座と関わるのは明治28年のことであった。東京を離れて土佐に移り、再び単身で上京し銀座尾張町の鰻屋「竹葉」の隣のI家の二階に世話になった。一月の短期間ではあったが、銀座での生活を経た寺田はかの地に対する深い興味と愛着を感じるようになった。新しい文化創出の場であり、江戸時代からあまり変わらぬ生活空間でもあった銀座では、多様な人間が集まっており、多くの無名の人物に混じって、当時の有名人の姿もあったことを寺田は「くりくり坊主の桃川如燕が張扇で元龜天正の武将の勇姿を叩き出している間に、手拭浴衣に三尺帯の遊び人が肘枕で寝そべって、小さな桶型の容器の中から鮓をつまんでいた」「天狗煙草が全盛の時代で、岩谷天狗の松平氏が赤服で馬車を駆っているのを見た」などと表現している。後に寺田は自然現象全般のみならず、人間活動の諸相（食堂や電車で偶然接した人々の様子等）を観察し、記録するようになる。彼の観察力は生来のものであろうが、特に人間に対する興味、人間を観察する力は、多様な人々の活動が見られる銀座で磨かれたのではないだろうか。

寺田が再上京時、銀座の食文化に接したことも注目に値する。

五丁目あたりの東側の水菓子屋で食わせるアイスクリームが、当時の自分には異常に珍しくまたうまいものであった。ヴァニラの香味がなんとも知れず、見た事も聞いた事もない世界の果の異国への憧憬をそそのものであった。それを、リキュールの杯ぐらいな小さな硝子器に頭を丸く盛り上げたのが、中学生にとってはなかなか高価であって、そうむやみには食われなかった。（…中略…）

父に連れられてはじめて西洋料理というものを食ったのが、今の「天金」の向側あたりの洋食店であった。変な味のする奇妙な肉片を食わされた

後で、今のは牛の舌だと聞いて胸が悪くなって困った。その時に、うまいと思ったのは、おしまいの菓子とコーヒーだけであった。

赤岩州五は、寺田がはじめて食べた西洋料理の店を「清新軒」であろうと考証している⁷⁾。寺田はコーヒーを好むあまり、随筆「珈琲哲学序説」(昭和8年)まで書いているが、既にこの頃菓子とコーヒーを楽しんでいた。また、父によって和食店「松田」に連れられた時は田舎と東京との料理の比較論を聞かされた。土佐の味と東京の味、和の味と西洋の味など、多様な食文化に接し、自分の舌で飲食物を比較することができる場所は銀座であった。寺田は銀座で様々な食を楽しむことになるが、その原点はこの時期に遡る。

明治28年の短期間の東京滞在後、寺田は熊本第五高等学校に入学する。明治30年には田丸卓郎に数学と物理学を、夏目漱石から俳句を習い、阪井夏子と結婚する。明治32年8月に大学入学のため単身東京に出て来た時のことを、「親に逢ひに行くやう」と後の書簡で書いている⁸⁾。下宿を決めるまでの数日はまた尾張町のI家の世話になり、谷中に落ち着いた後も、下宿生活が嫌で毎週土曜日には尾張町へ泊まりに行ったという。その時のことを「銀座アルプス」で

谷中の寺の下宿はこの上もなく暗く陰気な生活であった。土曜日に尾張町へ泊りに行くと明るくて暖かで賑やか過ぎて神経が疲れたが、谷中へ帰るとまた暗く、寒く、どうかすると寒の雨降る夜中ごろに蜜柑箱のようなものに赤ん坊の亡骸を収めた淋しい御葬いが来たりした。こういう墓穴のような世界で難行苦行の六日を過ごした後に出て見た尾張町の夜の灯は世にも美しく見えないわけにいなかったであろう。

と回想している。

このような状況を経て、妻夏子を郷里より呼び寄せた。長女も誕生するが、夫婦は病をえて転地療養することとなった。寺田は東京に戻るも、夏子が病没。この頃の日記には、「銀座迄行く Wickins Violin Tutorヲ求む 西洋料理を食ふ」(明治34年1月12日)「銀座初音にて汁粉食ふ」(明治35年12月17日)

等⁹⁾とあり、銀座に行って買い物や飲食をしていたことがわかる。人生の厳しい時期に、銀座で気分転換をしていたのであろう。

明治38年には二番目の妻寛子を迎え、40年に長男、42年に次男、45年に次女、大正4年に三女が誕生した。充実した研究生活も送っており、明治42年3月にはドイツ留学に出発した。当時の日記や書簡には、憧れの西洋での有意義な留学生活の様子が記されている。寺田はベルリンで大学の講義時間の合間、美術館見物や町歩きをし、菓子やコーヒーを楽しんでいた。この頃のベルリン歩きを後に「ベルリンのギンブラ」と形容している¹⁰⁾。

西洋諸国を遊歴して帰国してみると、寺田は銀座のみすぼらしさに気づくようになった。後に「二年ばかり西洋にいて、帰りにアメリカを通して、大きな建築などに見慣れて日本へ帰った時に、まず横浜の駐車場の小さいのに驚き、汽車の小さいのに驚き、銀座通りの家屋の低く粗末なのに驚いた」と書いている¹¹⁾。しかし、どんなに粗末に見えようとも、西洋文化を楽しめる場所として銀座にかわる場所は他にはなかった。帰国後「日曜に銀座の風月へよく珈琲を飲みに出かけた。当時ほかにコーヒーらしいコーヒーを飲ませてくれる家を知らなかった」という¹²⁾。日記にも「風月に行きてコーヒーを喫し」(大正3年9月26日)「銀座散歩 風月にてコーヒーを喫し」(大正3年11月23日)等の記録がある¹³⁾。

大正5年寺田は東京大学教授になり、6年には「ラウエ映画の実験方法及其説明に関する研究」で学士院恩賜賞を授与された。一方、妻寛子が大正6年10月に死去。寺田は母を失った幼い子どもたちを楽しませるための買い物も銀座でした。日記に「午後銀座に行き三光堂にて蓄音機(三五、〇)及音符若干を求む、十字屋にいきて西洋音符数種購入、夜蓄音機をかけ一同集りて楽しむ、子供等も大に喜ぶ」(大正7年1月4日)「銀座十字屋にいきレコード二つ求む、歌劇ドンブラコの譜本を求む」(大正7年1月27日)¹⁴⁾とある。この頃の寺田家の様子は随筆「蓄音機」に記されている¹⁵⁾。それによると、親類の家で蓄音機による「ドンブラコ」を聴いた寺田は感動し、「寒い雨の日に銀座へ出かけて器械と『ドンブラコ』のレコードを求めて来た。子供らの喜びは一通りではなかった」「その日のわが夜はいつになくにぎわった。なんとなしに子供の心を押しつけていた暗い影が少なくともこの夜はどこかへ行っ

てしまったような気がした」とあり、その後も子どもたちと音楽を楽しんだことが記されている。ドンブラコとは桃太郎を素材とした歌劇（作詞作曲 北村季晴）である。その他、寺田は子どもの玩具も銀座で購入していることが、以下の日記からわかる¹⁶⁾。「銀座に行き玩具店にて東一に puzzle 二種求む」(大正7年2月16日)「銀座に廻り東一の望のモーター一個と水彩色絵を求め帰る」(大正7年4月20日)「銀座に行き子供等に玩具を求め帰る」(大正7年6月2日)。

妻の死後、「おおぜいの子供をかかえて家内じゅうの世話をやく」¹⁷⁾ 寺田は、大正7年8月、三番目の妻酒井紳をめとる。翌8年12月、前から煩っていた胃潰瘍が悪化し、寺田は大学で吐血し入院。大学を休む。大正10年11月に大学に復帰するまで、療養生活に入る。

随筆「小さな出来事」(大正9年11月)には、寺田家のひとびとが銀座に出かけた時のエピソードが記されている¹⁸⁾。この年、寺田と家族の体調不良等の理由から、一家は夏休みの旅行もできずにいた。前の年に「みんなである夜銀座へ行ってアイスクリームを食った時の話」が出て、娘たちが今年も銀座に連れて行ってほしいと言い出したので、翌日の夕方、妻に子どもを連れさせて銀座へ遊びにやった。「末の二人はどんなよい処へ行くかと思われるように喜んで」出かけていったが、しばらくすると一行は帰宅し、末娘が泣いていた。夜店をひやかしているうち、娘は銀座を歩いても「どうして早く銀座へ行かないの」と尋ねたという。彼女は銀座というのはアイスクリームのある家の事だと思っていたらしい。子どもたちは、家族で銀座への外出を無上の楽しみとしていた。寺田自身が父親に銀座に連れていってもらい、珍しい物を見ておいしい物を食べた経験があったからこそ、子どもたちにも同じようにしてやりたかったのであろう。帰宅したとたん泣き出した娘の心情を察し「珍らしく繁華な街へ行つたから疳でも起こったのだろう」と寺田は言った。この出来事は、大正9年8月22日の日記にも記されており、父寺田寅彦にとって印象に残る出来事であったようだ¹⁹⁾。

日記からは、寺田自身が時々銀座に足を運んでいたこともわかる。大正9年頃の日記から、寺田の銀座での行動を見てみよう。「午後暖いから電車で銀座へ行って教文館をのぞいて見たが別にさしあたって見たいと思う本がなかった」(大正9年1月26日)、「自分も九時半頃から銀座へ行く 御堀の柳が目

出しかけた……服部商店で風力計風信器自記紙の代金を払ふ、教文館をひやかし」(大正9年4月9日)「銀座へ行き清新軒にて昼食、フィッシュボールと、鶏肉を試食す」(大正10年1月6日)、「銀座迄歩く 春日の苺のゼリーは非常に美しく爽快」(大正10年3月8日)等、外食も楽しんでいる²⁰⁾。西洋音楽が好きで自らバイオリンを弾いた寺田であったが²¹⁾、十字屋で蓄音機やレコードを購入している(大正10年4月5日、16日)。療養中の彼にとって、銀座はやはり趣味の買い物や魅力的な飲食物が楽しめる場所であった。

病気のために我慢していたコーヒーを飲み、それが興奮剤であることを身をもって知ったのも銀座であった。

珈琲が興奮剤であるとは知ってはいたが本当にその意味を体験したことはただ一度ある。病気のために一年以上全くコーヒーを口にしないでいて、そうしてある秋の日の午後久しぶりで銀座へ行行ってそのただ一杯を味わった。そうしてぶらぶら歩いて日比谷辺まで来るとなんだかその辺の様子が平時とはちがうような気がした。公園の木立も行交う電車もすべての常住的なものがひどく美しく明るく愉快なもののように思われ、歩いている人間がみんな頼もしく見え、要するにこの世の中全体がすべて祝福と希望に満ち輝いているように思われた²²⁾。

このコーヒー経験はいつのことだったのか。大正10(1921)年10月21日の日記に「丸善にて小宮君を待合せ八新亭に行き昼食。それより久々に銀座風月に行き五時頃まで談す。日比谷迄歩きて小宮君と別れ、電車満員故本郷町迄歩く、からだの具合佳し」²³⁾とあるので、この時のことではないかと思われる。なお、小宮君とは小宮豊隆(ドイツ文学者。大学時代に夏目漱石の門人となり、寺田寅彦の友人)である。

この年の日記にはしばしば銀座での行動が記されている。例えば「午後銀座へ散歩に行き、ウイニアウスキのエチュードカプリースを買って来る。(…中略…)往復の電車の中でShawのマニュアルを大分読んだ」(大正12年1月14日)「銀座へ行き風月で苺クリームを食ふ。山野楽器店でドナウエレンの楽譜を買って」(大正12年3月18日)「銀座で田丸先生夫妻に会ふ。第一相互

で夕食」(大正12年3月25日)などである。もっとも、同年春は不調であり、「しばらく日記を忘れて居た。(…中略…)近頃神経衰弱でも起つて居るのか、毎日午後になると殊に不快」と書かれている。8月には「夕方子供と銀座散歩、資生堂でアイスクリーム」(8月7日)「昼から銀座へ出かけて伊東屋でレターファイルなどを買った」(8月10日)「銀座のヤマトで夕食」(8月11日)「銀座へ灰皿を買ひに行く」(8月14日)と、復調すると銀座に出ていく様子がわかるのである²⁴⁾。

2 関東大震災と銀座復興

大正12年9月1日関東大震災が起こり、東京の街は一変した。一家の命と財産に別状がなかったのを幸いに、寺田は研究者として被災現場の視察を精力的に行い、復旧活動に取り組んだ。銀座も震災で大きな被害を受けた。寺田の銀座に関する文章を読んでいきたい。

震災後、留学中の小宮豊隆に宛てた郵便物から見ておこう。10月22日の震災絵はがき(「銀座(大震災ノ帝都ノ実況)」)には、写真に「建築中の銀座ビルデング 鉄柱がやけてあとが赤錆になって居る、ひどくやけたのは曲つて居る」と書き込んでいる。11月3日の書簡では「二三日前、丁度地震から二月目に銀座を通つて見たらまだ大部分は仮小屋も出来て居ないが、服部金太郎が大急ぎで可也大きな小屋(といふよりは博覧会の急造洋館のやうなもの)を建て、居るのと、銀座ビルディングの最下層に松屋の売店が出来かゝって居るのと、カフェライオンが妙な平べつたいペンキ塗の小屋で始めて居る位で火事跡の気分が未だ大部分残つて居る」と書いている。12月29日の書簡には「昨日は一日神田やら日本橋銀座をあるいて色々買い物をしました、主な商店は大抵所謂バラックが出来上つて賑々しく売出して居るし、又買手の方も中々盛んで一見中々景気がいいやうであります。震災でひどい目にあつた人々の心持の中には何かしら空虚なものがあつてそれを充たす為にもかういふ現象の起るのは当然だとも思ひました」²⁵⁾と書いている。

日記にも12月31日には「弥生と幸子をつれて神田から銀座、日本橋の通をあるいた」²⁶⁾とある。随筆では

震災後、久しぶりで銀座を歩いてみた。

いつのまにかバラックが軒を並べて、歳暮の店飾りをしている。

東側の人道には、以前のようにいろいろの露店が並び、西側にはやはり、新年用の盆栽を並べた蓑簀張りも出ている。

歩きながら、店々に並べられた商品だけに注目して見ていると、地震前と同じ銀座のような気もする。

往来の人を見てもそうである。

してみると、銀座というものの「内容」は、つまりただ商品と往来の人とだけであって、ほかには何もなかったということになる。

それとも地震前の銀座が、やはり一種のバラック街に過ぎなかったということになるのかもしれない。

と書いている²⁷⁾。煉瓦造りの建物が多かった銀座は火事に強いと思われていたが、地震で倒れなかった建物も焼けてしまった。生きている人間たち——物を売る側も買う側も——は活気に満ちていたが、その活気は、震災でひどい目にあつた人心の空虚さから来ているものと寺田には感じられた。

その後も小宮には「僕は子供と十字屋へ行つてレコードをかつて来ました、銀座辺の裏通りは今でも焼けた時のまゝな処がある。堀河の内には未だ死体の一つ二つは残つて居さうな気がする」(大正 13 年 6 月 7 日)と書き、コーヒーを飲んで「今度新築(仮)の風月はもとの店の向側で大分広くなつて居るやうです。ブルジョア気分はいよゝ濃厚らしい 今日僕も初めて行つて見ました、ボーイが昔からのも居るし新顔も見える、みんなアルパカかなんかの洋服のリヴェリーを着て居る。窓から焼跡の荒涼の景色が見える」(大正 13 年 6 月 8 日)と新しくなった店の様子を伝えている²⁸⁾。

銀座が、東京が、震災から復興していくのと同時に、不調であつた寺田もエネルギーを取り戻した。大正 13 年の日記の最後には「数年来眠つて居た活力が眼をさまして来たやうな気がする、いつも元気で気持ちが明るかつた」とある²⁹⁾。この頃から、いよいよ銀座に楽しみを見出すようになり、日記にも自分の趣味の買い物や(「銀座で又草花の種を買つて来て鉢植と箱に蒔く」大正 14 年 4 月 12 日)、一高に入学した長男のための買い物(「午後銀座の服部で東

一の懐中時計を求める」大正14年4月13日)をしたり、子供と出かける様子「午後子供と十字屋へ行きレコードを求め、資生堂で喫茶」(大正14年6月5日)、震災予防調査会手当て楽器を買ったことが書かれる(大正14年8月15日)³⁰⁾。

寺田は大正9年の「丸善と三越」で東京での買い物風景について書いており、百貨店には多大な関心を抱いていた。明治後期から大正時代にかけて、呉服店から成長脱皮していった百貨店は、人びとに高級なイメージを植え付けていったと同時に、新しい顧客として、知識階層でもあった上流、中流階層の人びとを開拓しようとしていた。昭和初期に、百貨店は都市生活にとって欠くことのできない存在になっていた。銀座にはそれまで一つも百貨店がなかったが、大正13年12月1日に松坂屋が銀座に進出し銀座店を出したのに続いて、大正14年5月1日にはそれまで神田今川橋にあった松屋が銀座に本拠を移している³¹⁾。今和次郎は『新版大東京案内』で松屋に注目し「焼け灰の中に鉄骨だけを聳えさせてみた銀座ビルの階下一円に紅白の幕を張りまはし、生活必需品のみをずらりと並べて帝都復興への第一声を揚げた松屋は目醒ましかった」と述べ、大正14年にオープンした銀座本館を「アラビア式高さ百二十尺のホールの大天井からステインド・グラスを通して落ちる五彩の光線はいつも場内に夢幻的な明るさを漲らせ、明るい店として手頃な買ひよい店として断然銀座になくてならぬ存在となった」と評した³²⁾。

百貨店の顧客であった寺田は、開店直後の松屋に行っている。大正14年5月2日の小宮宛書簡で「今日ギンブラの節、五月一日開店の松屋へはいり、屋上にあがつて市中を展望したら一寸愉快でした」と寺田は書いている。さらに「三越とちがうのは品川湾が近く見おろせるので一寸面白いやうです、一度登つて見る事を御す、め致します。それはさうと此の建物も大火に対する防禦が少しもしてない、吾々の眼から見るとかうも人間は呑気なものかと唯々呆れる計りであります」と、防火対策がなされていないことを指摘している³³⁾。社会に対して防災対策の必要を訴えた寺田らしい視点である。

ここで、今和次郎が大正14年5月に行った「東京銀座街風俗記録」にふれておきたい³⁴⁾。今は銀座を東京の風俗カルチュアの一大中心と認め、そこに集まる「銀ブラなる人種」を研究対象としようと考えたのである。銀ブラとは

「関東大震災後、急速に台頭していく銀座にあって、人々の振るまいを特徴づけていた行動形態」であり、「銀座の歩道をショーウインドーを眺めながら何をするでもなく一方から他方へブラブラ歩く」ことを意味する³⁵⁾。明治末頃から新しもの好きな人々による銀座散歩はなされており、寺田も子ども時代から家族に連れられて銀座を歩いていたが、この習慣が大衆的な行動形態として社会に広く浸透していたのは震災後であった。モダンな繁華街として発展する銀座にモボ・モガと呼ばれた人々が集まり、銀座を歩くことが文化の先端となり、流行現象となったのである。

今和次郎らの風俗調査は、大正14年5月7、9、11、16日の4日間、京橋から新橋までの間を歩行する人々を対象とした。この四日間に寺田寅彦が銀座を歩いた様子はないため、今の調査対象に寺田寅彦は含まれない。しかし、同年同月の別日に寺田が銀ブラをしていることから、試みに今の調査による「大正14年5月の銀座街風俗記録」の調査結果の中に寺田を置いてみる。当時の銀座を通行する人々の群れの中で、寺田はどのような存在だったのだろうか。

今によると、銀座の東側と西側とは人通りの波に相違があるという。東側は震災後大デパートメントストアができた影響で、銀座三丁目角の松屋と尾張町の交差点までが著しく人出が多かったという。前述したとおり、大正14年5月2日、開店直後の松屋に行った寺田は「銀座の最も人出が多い場所」を歩いていたといえよう。

今和次郎の調査では、銀座を歩く人の身分・職業構成比が、男43%／女24%／学生12%／店員8%／労働者7%／子ども6%／雑1%と算出されている。銀座を歩く寺田寅彦はこのデータ上、「男43%」に含まれる。また、年齢による人出について、男性は20代が最高、ついで30代、それから40代、10代の順（女性は10代、20代が最高）になると今は述べているので、大正14年当時40代だった寺田は銀座を歩く男性の中では少ない部類とみなされる。今の調査では銀座の通行人男性の67%が洋服だったと書かれている。寺田がどのような格好で銀座を歩いていたかは定かではないが、おそらく洋服だったと推測しておく。また、今によると銀座の通行人の男性の69%がひげをはやしており「刈込んで口のうえいっぱい幅のものが今日の中年の紳士の標準型」という。写真を見る限り寺田も、中年の紳士の標準型に属すると思われる。

また、銀座を歩く人は何かしら携帯しており、から手の人はほとんどないと今は述べる。銀座で買い物をすることが多かった寺田も、買い物包みを持った大多数の中に含まれるであろう。また、通行人の5%が喫煙していたという。この場合の喫煙とは、調査者が出会った瞬間にたばこをくわえているか手に持っているかで判断される。煙草が好きだった寺田は、随筆「喫煙四十年」で「ある日の午後煙草を吹かしながら銀座を歩いていた」³⁶⁾と書いており、場合によっては5%の喫煙者に該当したはずである。

今和次郎の考現学は、かくの如く、東京で活動する人々の生活風俗を記録したものであった。寺田は今とは違った方法で、銀座を記録したいと考えていた。写真撮影をもくろんだのである。大正14年2月15日の日記に「写真器を持って銀座迄行つたが一枚も撮らなかった」³⁷⁾と寺田が書いているが、カメラを携帯して人や町を記録しようとする意欲を持っていたのは興味深い。

寺田は随筆「カメラをさげて」で、「写真機を持って歩くのは、生来持ち合わせている二つの目のほかに、もう一つ別な新しい目を持って歩くということになる」とし、写真機という「特別な目をぶらさげて歩いているだけでもかなり多くの発見をする」と述べる。その具体的な例として、彼は

手近な些末な例をあげると、銀座の裏河岸のある町の片側に昔ふうの荷車が十台ほどもずらりと並べておいてある、その反対側にはオートバイがこれも五、六台ほど並んで置かれてあった。その平凡な光景がカメラの目からは非常におもしろく見えるのであった。昭和通りに二つ並んで建ちかかっている大ビルディングの鉄骨構造をねらったピントの中へ板橋あたりから来たかと思う駄馬が顔を出したり、小さな教会堂の門前へ隣のカフェの開業祝いの花輪飾りが押し立ててあったり、また日本一モダンなショーウィンドウの前にめざしの頭が二つ三つころがったりするのやはりカメラの目を通して得られた小さな発見であった。

こういう目をもって見て歩いた新東京の市街ほど不思議な市街はおそらく世界じゅうどこを捜してもないであろう³⁸⁾。

極端な古いものと極端な新しいものとが並び合う様に注目し、寺田は東京市

街の風景を「おもちゃ箱やごみ箱を引っくり返したような乱雑さ」「つづれの錦の美しさ」と評した。

復興後の東京は、新旧併せ持つ雑多な風景を見せていた。今和次郎の考現学は、新たな銀座を対象として始められた。寺田も同様に目の前の銀座を記録したいと考えたが、若い頃から慣れ親しんだ場所であっただけに、新しいものと同様古いものに関心が向かうのであった。なお、今の調査では、銀座の通行人の携帯品の中に写真機という項目はない。おそらく、当時写真機を携帯して銀座を歩行している人物はあまりおらず、寺田の姿はかなり珍しかったのではないだろうか。

3 生活と科学の交差点

震災後、変貌した銀座を寺田は歩き続け、昭和8年には随筆「銀座アルプス」を発表する。震災後の寺田について、弟子の中谷宇吉郎は以下のように回想している。

発表論文五篇、翌大正十五年に七篇、次の昭和二年が十一篇、昭和三年が二十六篇というふうに、驚異的な進展をみせて行こうとする、その準備が、この頃もちろん先生にも意識されずに、着々と出来ていたのであった。(…中略…) 当時のことを思い返してみると、先生はいつも飄然とした姿で実験室に顔を出され、昼食にはきまって銀座へ出て行かれて、竹葉か三越かで食事を取り、あと風月あたりでコーヒーをのんでゆっくりして帰って来られた。そして僕は三時間労働説なんだとにやにやしておられたものであった³⁹⁾。

寺田は研究している仕事が行き詰まってしまって、どうにもならないような時にコーヒーを飲むという。すると「頭の中に一道の光が流れ込むような気がする」と同時に、やすやすと解決の手がかりを思いつくことがしばしばあるようである⁴⁰⁾ という。彼の仕事は、銀座で飲むコーヒーが支えていたのである。

この頃の寺田の書簡から、銀座に関する記述箇所を見ておこう。昭和2年

11月27日の小宮宛書簡では「時々寂寥な心持になる事もありますが少生のは至つて浅薄な主として生理的のものなので一辺ギンブラでもして丸善三越を訪問してくるとすくなほる」⁴¹⁾、昭和3年11月8日の円地与四松宛書簡では「僕は不相変ギンブラ党（但し夜はメツタに行かないからプロパーな意味でのその資格はないかもしれないが）で不二屋のコーヒ一杯の為にわざ／＼出かける」と書いている⁴²⁾。

昭和3年の書簡には「淋しさ」「心の穴」という表現が散見される。2月21日小宮宛書簡では「僕のうちは「淋しき人々」の集合であります 長男神経衰弱で学校をうちやらかし悪化の兆しあり、閉口 おやぢが余り研究／＼と夢中になり家庭はメチャ／＼」と書き、昭和4年9月15日の安倍能成宛書簡では「不二屋へ出勤、一杯の黒褐色の薬液で「心の穴」を充たして帰宅。ユダヤ人の心の穴が段々少しづつ、大きくなって時々痛む、甚だ心細い。日本人が羨ましいやうな気もするが、どうも仕方がない」昭和4年9月15日の藤岡由夫宛では「院展を見て人いきれに蒸されて、それから御苦勞にも不二屋へ行つて「心の穴」に一杯のコーヒを充たして帰りました」と書いている。自分をさまよえるユダヤ人にたとえたのは、昭和4年11月1日 桑木彥宛書簡「さまよへるユダヤ人は無精にて漂浪は唯机の上頭の中のみ 此好季節に郊外へ出るでもなく不相変銀座不二屋のコーヒ一杯にて心の穴を充たす位に有此候」であるが⁴³⁾、同時期には「さまよえるユダヤ人の手記より」と題した随筆も発表している（昭和4年9月『思想』）。

昭和5年1月1日の矢島祐利宛年賀状で寺田は「職業 論文随筆濫造業 持病 胃潰瘍、ギンブラ等」と自称している。同年3月1日には仙台の小宮宛書簡に、「銀座街頭を行交ふモボ、モガはもとよりモザー、モバーの顔も自ら春めきていよ／＼3月1日となり候」と書いている⁴⁴⁾。ここで、モボ、モガという言葉が出て来たが、当時の銀座はモボ（モダンボーイ）、モガ（モダンガール）の街として知られていた。安藤更生の『銀座細見』の銀座の通行人調査（昭和4年9月実施と思われる）によると、男性は20代、女性は10代が多いとされ、昭和初期の銀座を若者の町としている。安藤は「老人は銀座を歩かない。それは年齢が自然にさせる保守的な気持が、この異国的な、先端的な街を受け容れないからであろう。たまに歩いている老人は、歳を忘れたようなハイカラ爺さ

ん」と書いている⁴⁵⁾。銀座の歩行者は若者が多かったが、その中には少数派ながら高齢者もいた。そうした高齢者を寺田は「モザー、モバー」と称している。既に五十代となっていた自分や友人たちが銀座の高齢者であることを自覚していたのであろう。

高い所にのぼるのが好きだった寺田は、都会のビルの上から町を眺めるのを好んでいた。随筆でも「第一相互館の屋上で夜の銀座をながめていた」「初夏のある日友人と京橋近くの七階楼上で昼飯を食った。すがすがしい好晴の日で食卓から見下ろす銀座方面のながめははればれと明るくいきいきと美しいものであった」⁴⁶⁾等の記述が散見される。書簡でも「昨夜は若い人達と京橋の第一相互ビルの東洋軒で食事をし気焰を上げましたが、夕方は天気がよくて屋上の涼風に吹かれながら銀座のイルミネーションを眺めるのはいつもながら美しいと思ひました。近頃は所謂ネオンサインが多くなったので色彩の変化が多くなって一層奇麗であります」(昭和6年6月30日 高嶺俊夫宛)⁴⁷⁾とあり、さらに自分が子どもの頃から街の灯を遠くから見るのが好きだったと書いている。都会の高い建物を山にたとえる「銀座アルプス」の発想は、昭和6年8月10日の玉野光男宛書簡中の表現「小生幸に無事不相変銀座アルプス跋涉」⁴⁸⁾に既に見られる。

昭和7年12月7日、娘の雪子が階段から落ちて怪我をした。寺田はつてを頼って医師を探して雪子を入院させた。この頃の親族や友人宛の書簡に経過が記されている。12月10日には「一時はどうなる事かと思ったが天祐により危き一命を助かり(…中略…)安心して家で寝られます」と松根東洋城に葉書を書いている⁴⁹⁾。その後も寺田は病院通いをしていた。日記によると、12月31日には家族で見舞に行った後、「三越昼食、銀座神田をひやかして帰る」、翌日の昭和8年1月1日には「夜中央公論原稿「銀座アルプス」最後迄書上げる」とある⁵⁰⁾。この原稿を寺田がいつ書き始めたかは不明だが、雪子の入院中、実際に銀座を歩きながら「銀座アルプス」の文章を練っていたのであろう。

「銀座アルプス」は、寺田が子どもの頃から現在にいたる銀座との関わりを記したものであるが、あらためて注目したいのは、寺田が「銀座を歩く人の空虚」を語っている点である。昭和に入ってから彼の書簡に「心の穴」という表現が散見されることは指摘したとおりだが、空虚さを感じるので銀座

に行く自分の心情を、一般化しようとしてこう述べる。

今日いわゆるギンブラをする人々の心はさまざまであろうが、そういう人々の中の多くの人の心持には、やはり三十年前の自分のそれに似たものがあるかもしれない。みんな心の中に何かしらある名状しがたい空虚を感じている。銀座の舗道を歩いたらその空虚が満たされそうな気がして出掛ける。ちょっとした買い物でもしたり、一杯の熱いコーヒーでも飲めば、一時だけでもそれが満たされたような気がする。しかしそんなことでなかなか満たされるはずの空虚ではないので、帰るが早いか、またすぐに光の街が恋しくなるであろう。

暇があったら本当の自然（アルプスの尾根等）の中に行ってもよいのにそれをせず、定期的に繁華街に通う自分を含めた都会の人間を「光を怖れながら光を慕う虫」に例える。彼は銀座を礼賛（美しい物と人、銀座の灯）するだけではなく、醜さ（暴風の後や正月元旦の光景）や不便さ（本当においしいコーヒーや欲しい商品が見つからない）も指摘する。銀座とは、そこに行けば一時の満足を得られるものの、完全に欲望を満たすことはできない所である。常に人の欲望をかきたてる銀座の特徴をみごとに指摘している。

また、「銀座アルプス」に、防災対策の必要性が訴えられているところに、寺田寅彦らしさがあらわれている。火事や地震に対して、銀座松屋に最初に入った時に火事に対する備えがなされていないと指摘した寺田だったが、昭和7年12月16日には日本初の高層建築火災である「白木屋火災」が起こってしまった。「銀座アルプス」で寺田はデパート火災について、

アルプスにも山火事があるように、デパートにも火事がある。山火事は谷から峰へと燃え上がるが、また上から下へも燃えていく。しかし、デパートの火事は下へは燃えないで、上へばかり燃え抜けるから、逃げ道さえあいていれば下へ逃げればよい。下へ逃げ損なったら頂上の岩山の燃草のない処へ行けば安全である。

と書き、具体的な心得を記している。その後も随筆「火事教育」で、火災の被害を減ずるためには教育が必要であると述べ、銀座伊東屋で買った外国の絵本を参考に具体的な提言をしている⁵¹⁾。

寺田は、地震対策の必要性を訴えて「銀座アルプス」を締めくくっている。地震は自然現象であるから、20世紀の終わるか21世紀の初め頃までには関東大地震が起こるはずであり、その時の用心は今から心がけなければ間に合わないが、その頃の東京では地震のことは忘れ去られているだろうというのだ。

それにもかかわらず今日の政治をあずかっている人たちで地震の事などを国の安危と結び付けて問題にする人はないようである。それで市民自身で今から十分の覚悟をきめなければせっかく築き上げた銀座アルプスもいつかは再び焦土と鉄筋の骸骨の沙漠になるかもしれない。それを予防する人柱の代わりに、今のうちに京橋と新橋との橋のたもとに一つずつ碑石を建てて、その表面に掘り埋めた銅版に「ちょっと待て、大地震の用意はいいか」という意味のエピグラムを刻しておくといいかと思うが、その前を通る人が皆円タクに乗っているのではこれもやはりなんの役にも立ちそうもない。むしろ銀座アルプス連峰の頂上ごとにそういう碑銘を最も眼につきやすいような形で備えたほうが有効であるかもしれない。

寺田が銀座に記念碑を作る提案をした年は、関東大震災後10年でもあり、この年9月1日、銀座数寄屋橋交差点に震災記念塔が設置された。寺田寅彦の提言と記念塔設置には、何か関係があるのだろうか。今村恒明の『地震の国』(1949年)は、

天災は忘れた時分に来る。故寺田博士が、大正の関東大震災後、何かの雑誌に書いた警句であったと記憶してゐる。(…中略…) 寺田博士の天災に関する警句に最も共鳴したものは震災共同募金会(震災防救協同会とすべきか)であらう。これは、有馬頼寧伯が大正十三年九月一日其の一族を率ゐて街頭で大衆の義金を集め、之を以て内外罹災者の急を救ひ、

或は災厄を予防する基金にしようといふに創まつたのであるが、爾来廿三年間東京朝日新聞社が之を後援してゐるのに顧みても其の健實さがわかるであらう。そして其の十周年に当り、会が記念事業の一として選んだのが、かの警句を生かす記念塔の建設である⁵²⁾。

と書いている。震災記念塔には朝日新聞社が全国に懸賞応募した作品から選ばれた標語「不意の地震にふだんの用意」が刻まれ、北村西望による像が設けられた。今村によると「不意の地震にふだんの用意」の標語のもととなった警句は寺田寅彦の「天災は忘れた時分に来る」であるとされる。しかし、一般的には寺田寅彦の言葉とされている「天災は」の警句だが、文献の根拠は確認されておらず、初山高仁は、寺田本人は「天災は忘れた頃来る」のような定まった表現を公言してはいなかったと述べている⁵³⁾。よって、今村がいうように、寺田寅彦の警句が震災記念塔の設置に直接関わったとはいえないが寺田が多方面で防災を訴えたことは確かである。銀座に作られた記念塔は、寺田の「銀座アルプス」での提言を結果的にあらわしている。

寺田寅彦は、時に生活者として、時に科学者として銀座を歩いた。銀座は寺田に飲食や娯楽、買い物など様々な生活上の楽しみを与えてくれる刺激的な繁華街であった。そして、長年銀座を見てきた科学者として、寺田は火事や地震に対する備えの重要性を訴えずにはいられなかった。「銀座アルプス」は、生活者として科学者としての寺田寅彦をよくあらわした随筆である。言い方を変えると、寺田寅彦にとって銀座は生活と科学の交差点であったともいえるだろう。

「銀座アルプス」以後も、寺田は銀座に通い続けた。昭和9年1月12日の藤岡由夫宛書簡（銀座コロバン2階の葉書）に「銀座縦走横走はとき／＼は忘れぬ程度に勉強致します」、同年1月17日の安部能成宛て書簡では「銀座で今日は新開の不二アイスクリーム（教文館）で例のコーヒー哲学を哲学して居る」などからわかる。昭和10年6月2日黒田初子宛書簡で「唯今銀座紀の國屋で「現代」6月号を求めまして向ひ側へ渡り不二屋で苺とコーヒーを注文した処であります」と書いた⁵⁴⁾。

その3ヶ月後の9月に腰痛を感じた寺田は、移転性骨腫瘍で12月31日に

世を去る。『回想の寺田寅彦』の病床記によると、満足に食事がとれなくなった寺田は、特に苺を欲しがっていたという⁵⁵⁾。昭和10年12月3日の書簡（小林勇宛（妻代筆）には、「夫は苺のシャーベット又は之れが無ければ苺のアイスクリームが欲しくて、銀座辺を捜して居りますが未だ見つかりません」）と書かれている⁵⁶⁾。『回想の寺田寅彦』によると、その日の午後によく小林は苺のシャーベットを入手することができ、さらに12月6日の夜に寺田家から電話があったので小林は再び苺のシャーベットを届けたという。同書において専任の看護婦・飯田のぶ子はこう書いている。

毎日のやうに女中さんが銀座迄いちごやアイスクリーム、シャーベットを求めに参りました。旦那様は、そのお使いのかへつて来るのを楽しみにしてお待ちになつてゐまして、女中さんの出がけには、かへりには自動車にのつて急いで来いとおひつけになるのです。私が女心の狭い量見から、つい、今いちごなど高くて大変でございますね、と口を迂らせましたところ、旦那様は、僕は普段少しも贅沢をしてゐないから、こんな時は少しも構はず、いくら高くてもどん／＼ほしいものは買つて貰ひ度いと仰言ひました⁵⁷⁾。

亡くなる直前、寺田は好物の苺とアイスクリームを手に入れるため、銀座まで使いを出していた。自分には「銀座線」があると書いた寺田寅彦であったが、彼の「銀座線」は人生の終わりまで続いていたのである。

註

- 1) 小宮彰「大正九年における寺田寅彦の随筆の始まり」『日本文学』第111号、東京女子大学、2015年3月、23-37頁。
- 2) 吉田夏彦「一つのテーゼ」『寺田寅彦全集 第21巻』月報21、岩波書店、1998年。『寺田寅彦全集 全30巻』岩波書店、1996-1999年。
- 3) 赤岩州五編著、原田弘・井口悦男監修『銀座 歴史散歩地図 明治・大正・昭和』草思社、2015年、18-28頁。
- 4) 松本哉『寺田寅彦は忘れた頃にやって来る』集英社新書、2002年、50-58頁。松本哉は、寺田家の住居の変遷を地図上に示し、「寺田寅彦が家を構えたのは四つの場所に集約されるが、いずれも当時の東京市本郷区、現在の東京都文京区であり、西片町や曙町は著名な学者の住む場所として有名である」と述べている。

- 5) 寺田寅彦と志村については、松本の前掲書の他、石橋正孝・松村公明「寺田寅彦と東武東上線」「寅彦の武蔵野を探して」立教大学観光学部編『大学的東京ガイド こだわりの歩き方』昭和堂、2019 年を参照。
- 6) 本稿での「銀座アルプス」の引用にあたっては、寺田寅彦『銀座アルプス』角川ソフィア文庫、2020 年を使用した。
- 7) 前掲、『銀座 歴史散歩地図 明治・大正・昭和』、24 頁。
- 8) 『寺田寅彦全集 第 30 巻』、1999 年、6 頁。
- 9) 『寺田寅彦全集 第 18 巻』、1998 年、134-5 頁、238 頁。なお、この書の解説で、太田文平は「寺田の全日記中に占める「父親日記」の量がかなり大きな比重を持っている事実」、「子供達に関連する記述が詳細であり、具体的である」と述べている。
- 10) 寺田寅彦「珈琲哲学序説」、前掲、『銀座アルプス』、316 頁。
- 11) 寺田寅彦『柿の種』岩波文庫、1996 年、115 頁。
- 12) 『銀座アルプス』、318 頁。
- 13) 『寺田寅彦全集 第 19 巻』、310 頁、318 頁。
- 14) 『寺田寅彦全集 第 20 巻』、1998 年、142 頁、149 頁。
- 15) 『寺田寅彦随筆集 第 2 巻』岩波書店、1947 年、所収。
- 16) 『寺田寅彦全集 第 20 巻』、154 頁、168 頁、178 頁。
- 17) 『寺田寅彦随筆集 第 2 巻』、12 頁。
- 18) 寺田寅彦『科学歳時記』角川ソフィア文庫、2020 年、所収。
- 19) 『寺田寅彦全集 第 21 巻』、1998 年、82 頁。
- 20) 『寺田寅彦全集 第 21 巻』、15 頁、36 頁、122 頁、136 頁。
- 21) 寺田寅彦の音楽の趣味については、末延芳晴『寺田寅彦 パイオリンを弾く物理学者』平凡社、2009 年を参照。
- 22) 『銀座アルプス』、320 頁。寺田のコーヒー好みについては 池内了『ふだん着の寺田寅彦』平凡社、2020 年を参照。
- 23) 『寺田寅彦全集 第 21 巻』、198 頁。
- 24) 『寺田寅彦全集 第 22 巻』、1998 年、12 頁、24-25 頁、27 頁、32-34 頁。
- 25) 『寺田寅彦全集 第 27 巻』、71 頁、81 頁、87 頁。
- 26) 『寺田寅彦全集 第 22 巻』、70 頁。
- 27) 前掲、『柿の種』、74 頁。
- 28) 『寺田寅彦全集 第 27 巻』、108 頁、110 頁。
- 29) 『寺田寅彦全集 第 22 巻』、93 頁。
- 30) 『寺田寅彦全集 第 22 巻』、74-75 頁、84 頁、113 頁。
- 31) 初田亨『百貨店の誕生』三省堂、1993 年、174-207 頁。
- 32) 今和次郎編纂『新版大東京案内』上 ちくま学芸文庫、2001 年、204 頁。
- 33) 『寺田寅彦全集 第 27 巻』、171 頁。
- 34) 今和次郎「東京銀座街風俗記録」は、藤森照信編『今和次郎 考現学入門』ちくま文庫、1987 年、所収。
- 35) 吉見俊哉「モボ・モガ」『江戸東京学事典』三省堂、1987 年、220 頁。
- 36) 『寺田寅彦全集 第 4 巻』、75 頁。
- 37) 『寺田寅彦全集 第 22 巻』、108 頁。
- 38) 『寺田寅彦随筆集 第 3 巻』、39 頁。
- 39) 『中谷宇吉郎随筆選集 第 2 巻』朝日新聞社、1967 年、65 頁。
- 40) 『銀座アルプス』、319 頁。
- 41) 『寺田寅彦全集 第 27 巻』、372 頁。
- 42) 『寺田寅彦全集 第 28 巻』、119 頁。
- 43) 『寺田寅彦全集 第 28 巻』、21 頁、189 頁、191 頁、204 頁。
- 44) 『寺田寅彦全集 第 28 巻』、228 頁、252 頁。

45) 安藤更生『銀座細見』1977年、中公文庫、43頁。

46) 前掲、『柿の種』、206頁、241頁。

47) 『寺田寅彦全集 第29巻』、36頁。

48) 『寺田寅彦全集 第29巻』、52頁。

49) 『寺田寅彦全集 第29巻』、200-201頁。

50) 『寺田寅彦全集 第22巻』、243頁、245頁。

51) 寺田寅彦『天災と国防』講談社学術文庫、2011年、所収。

なお、文中で寺田は絵本を紹介しているが、その書誌情報は明らかにしていない。おそらく、この本はサムイル・マルシャーク＝詩 ウラジーミル・コナシェーヴィチ＝絵の『火事』（初版1923年）ではないかと思われる。寺田による粗筋と絵の解説と、『火事』の復刻版（『幻の絵本』復刻シリーズ5）をつきあわせてみると、内容が合致している。復刻版の解説によると、『火事』は1923年に大判で出たものをハンディなサイズに描き尚した改訂版があり、当時日本にも数多く輸入されていた。画家コナシェーヴィチはロシア絵本の黄金時代を築いた画家であり、寺田が銀座伊東屋で目にして買った可能性も高い。

52) 今村明恒『地震の国』文藝春秋新社、1949年、197-203頁。

53) 初山高仁『『天災は忘れた頃にやってくる』のなりたち』『尚絅学院大学紀要』第73号、尚絅学院大学、2017年。

54) 『寺田寅彦全集 第30巻』、12頁、232頁。

55) 小林勇編『回想の寺田寅彦』岩波書店、1950年、172頁。

56) 『寺田寅彦全集 第30巻』、321頁。

57) 前掲『回想の寺田寅彦』188-189頁。

<ABSTRACT>

Terada Torahiko and his experience of Ginza Strolling

YOKOYAMA Yasuko

This paper examines Terada Torahiko's unique perspective toward the Ginza area in Tokyo through a close reading of his texts. Terada Torahiko (寺田寅彦 1878-1935) was one of the renowned Japanese physicists whom he called himself Ginbura-an-Shujin (Master of Ginza walker). His enthusiasm toward Ginza led him to stroll around the area for his entire lifetime. Ginza was the best place for Japanese modernists to encounter Western civilization at that time. Analyzing Terada's text shows how one Japanese intellectual who had a great longing for Western civilization was attracted to the place.

During his youth, Terada had his first Western food at a restaurant in Ginza and soon became a coffee lover. After returning from study abroad in Europe, he constantly enjoyed shopping around the Ginza area and purchasing imported goods, such as records, musical instruments, picture books, and so on. The coffee shops were also his favorite place in Ginza, and he even wrote an essay entitled *Introduction to Coffee Philosophy* (『珈琲哲学序説』). One reason he often visited Ginza was that a cup of coffee always helped him refresh his mind and obtain some inspiration for works.

In his essay *Ginza Alps* (『銀座アルプス』), Terada referred to mob psychology and suggested that many people visiting Ginza are feeling a sense of emptiness in their lives. Terada also had a similar sentiment and shared his sense of emptiness and loneliness in letters sent to his close friends. Nevertheless, by visiting Ginza, he could somewhat fill in the empty hole in his heart, even just a brief moment.

In 1923, the Great Kanto earthquake occurred, and Ginza was also devastated by fire. As a physicist, Terada energetically researched earthquake-

stricken areas. In *Ginza Alps*, Terada emphasized the significance of disaster prevention and suggested building a monument in Ginza to remember the earthquake. He also warned of fires on high-rise buildings and wrote measures to escape from a fire. As a Ginza lover physicist, he earnestly examined the ways to maintain the town for the future.